

機動部隊旗艦「大和」 1

鋼鉄の守護神

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

序章

9

第一章 災厄の珊瑚海

19

第二章 総統放逐

49

第三章 MI作戦の行方

65

第四章 「大和」猛然

93

第五章 ニュージョージア沖海戦

157

第六章 反攻の一手

207

・ミッドウェー島

ハワイ諸島
真珠湾

太平洋

ツラギ
フロリダ諸島
ガダルカナル島

サモア

フィジー

ニューカレドニア島

160°E

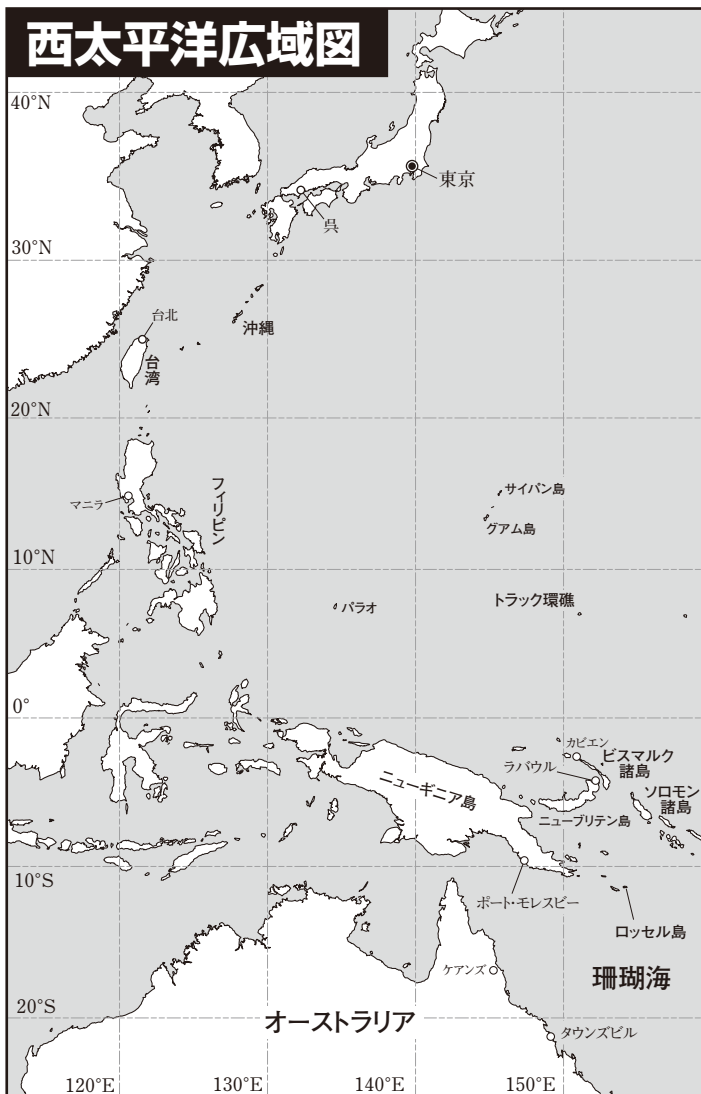
170°E

180°

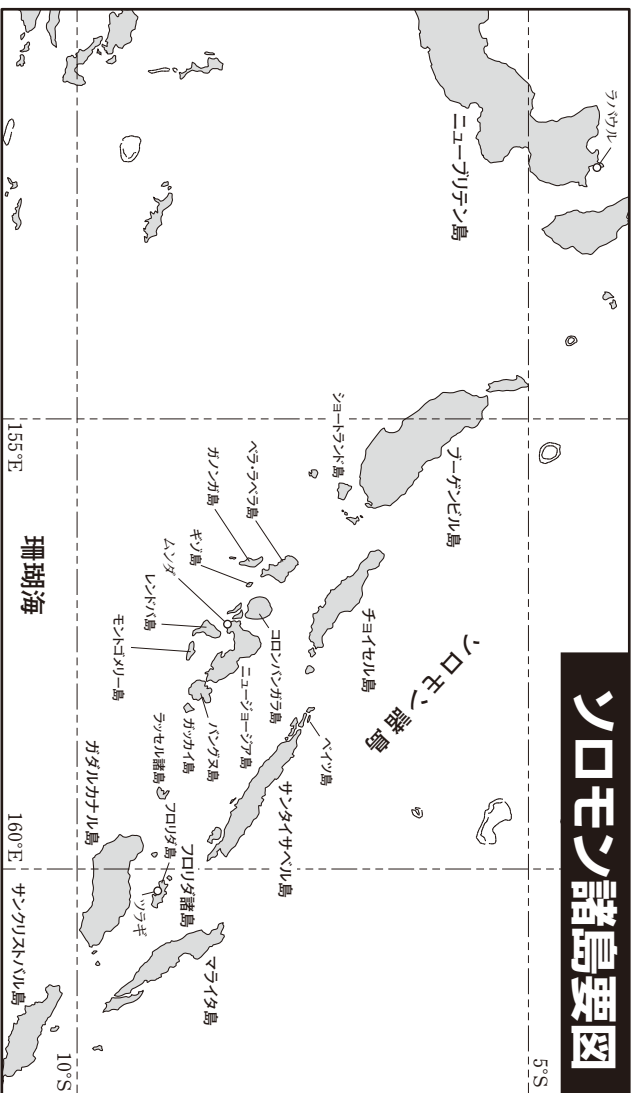
170°W

160°W

西太平洋広域図



ソロモン諸島要図





機動部隊旗艦「大和」 1

鋼鉄の守護神

序章

初夏の明るい日差しが、その巨艦を照らしていた。中央に艦橋と煙突、後部指揮所がそびえる様は、岩峰が連なっているように見える。

主砲は三連装。前部に二基、後部に一基だ。

四六センチの口径は、これまで列国の戦艦が採用したどの砲よりも大きい。

艦の中央部は、左右に大きく膨らんでおり、防御装甲の厚みを感じさせる。

たいていの戦艦の主砲弾は、あっさり弾き返してしまいそうだ。

戦艦「大和」。

昭和一六年一二月一六日に竣工した、日本帝国海軍最大にして最強の戦艦が、瀬戸内海の柱島泊地に、鋼鉄製の艦体を浮かべていた。

上甲板には手空きの全乗員が整列し、新たな指揮官の到着を待っている。

この年——昭和一七年二月二日、「大和」は連合艦隊の旗艦に任じられ、檣頭には誇らしげに大将旗を掲げていた。

だが今、その旗は下ろされている。

「大和」は僅か三ヶ月ほどで、連合艦隊の全艦艇を統べる旗艦の任を解かれたのだ。

山本五十六大將以下の連合艦隊司令部幕僚は、新たな旗艦に定めた「陸奥」に、将旗を掲げている。「大和」の竣工前は、姉妹艦の「長門」と交替で、連合艦隊旗艦を務めた艦だ。

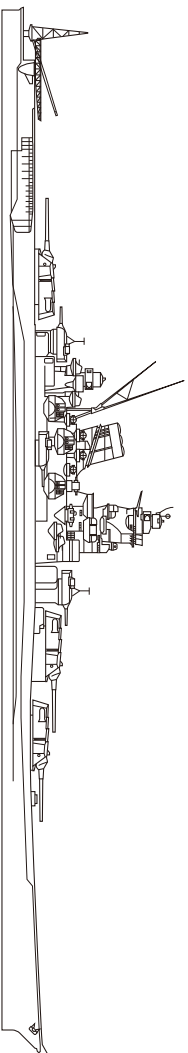
連合艦隊には「最強の戦艦を旗艦とする」という伝統がある。

日露戦役の折、当時の連合艦隊司令長官東郷平八郎大將が旗艦に定めた「三笠」も、その時点においては、紛れもない帝国海軍最強の戦艦だった。

山本は取えてその伝統を破り、帝国海軍の戦艦では番手となる長門型戦艦に将旗を移したのだ。

一三時三〇分、「大和」の艦首左舷に、一隻の内

日本海軍 大和型戦艦「大和」



全長	263.0m
最大幅	38.9m
基準排水量	64,000トン
主機	艦本式タービン 4基/4軸
出力	153,000馬力
速力	27.5ノット
兵装	46cm 45口径 3連装砲 3基 9門 15.5cm 60口径 3連装砲 4基 12門 12.7cm 40口径 連装高角砲 6基 12門 25mm 3連装機銃 8基 13mm 連装機銃 2基 水上機 6機/射出機 2基 2,500名
航空兵装	
乗員数	武蔵(建造中)
同型艦	

日本海軍の最新鋭戦艦、大和型の1番艦。46センチ砲の威力は現時点で世界最強である。さらに、それに釣り合うだけの防御力を備えることから、不沈戦艦と称されている。

日本海軍は、昭和12年にワシントン海軍軍縮条約が失効を迎えたあと、仮想敵である米国が建造するであろう新型戦艦に対抗すべく、18インチ砲(46センチ砲)を搭載した大型戦艦の建造を決定。中国大陸での戦闘が長期化するなか、極秘に建造が進められ、日米開戦の8日後である昭和16年12月16日に竣工した。その後、ただちに慣熟訓練に入り、昭和17年2月12日に連合艦隊旗艦となった。

2番艦「武蔵」は三菱重工業長崎造船所で建造中であり、昭和17年8月の竣工を目指して工事が進められている。

火艇が接舷した。

艦上に、ラッパの音が高らかに鳴り渡った。

中将の徽章を付けた将官が、舷梯を上がつて来た。

「大和」艦長高柳儀八少将、副長梶原季義中佐、航海長植村正夫中佐といった幹部乗組員が舷門に整列し、直立不動の姿勢で迎えた。

高柳は、「大和」艦長就任時は大佐だったが、五月一日付で少将に昇進している。戦隊の司令官や艦隊の参謀長に異動してもおかしくなかったが、海軍省は「今、艦長を交代させては、艦の作戦行動に支障を来す」との理由で、高柳を現職に留めていた。

「敬礼！」

の号令がかけられ、上甲板に整列している乗員が、一斉に敬礼した。

「海ゆかば」が奏でられる中、将官は幕僚たちを従え、「大和」乗員に答礼を返ししながら、ゆつくりと艦橋に向かって歩を進める。

高角砲を担当する第五分隊の下士官や兵にも、「大

和」に乗り込んで来た人々の姿が見え始めた。

「あの人が、真珠湾をやつた指揮官ですか」

三番高角砲の砲台長矢部亮介一等兵曹に、旋回手の川崎猛夫二等兵曹が囁きかけた。

南雲忠一中将。

日本海軍が初めて編成した空母機動部隊、第一航空艦隊の司令長官だ。

昨年一二月八日の真珠湾攻撃を皮切りに、南方作戦の支援、インド洋海戦と次々に勝利を収め、緒戦の勝利に最も大きな貢献をした人物でもある。

その南雲が、部下の司令部幕僚と共に、「大和」に乗艦して来たのだ。

「そんなに凄い人には見えませんね」

川崎は、意外そうに言った。

太平洋からインド洋までを縦横に駆け巡り、米英の艦隊を打ち破つて来た指揮官だけに、豪傑肌の偉丈夫を想像していたのかもしれない。

だが、「大和」の上甲板に上がつて来た南雲は、

小柄で穩やかな顔つきの持ち主だ。

紺色の第一種軍装に身を固めていなければ、軍人には見えない。

農村で、孫たちに囲まれている好々爺を思わせる風貌だった。

「顔と能力は別さ」

矢部は、川崎に囁き返した。

海兵团で訓練を受けているとき、かの東郷元帥や東郷を補佐した加藤友三郎參謀長、秋山真之作戰參謀といった人々の写真を見せられたことがあるが、理知的で、柔和な顔つきの持ち主だった。

この直前まで、「大和」に乗っていた山本長官にしても、豪傑肌の偉丈夫ではない。

大軍を統率する指揮官とは、あのような人なのかと思う。

——矢部らには直接見えなかったが、このとき「大和」のマストには、中將旗が掲揚されている。八本矢の旭日旗の上端を、赤く縁取ったものだ。

旗は瀬戸内海を渡る風に吹かれ、青空を背に、力強くはためいた。

「大和」が南雲の指揮下に入り、第一航空艦隊の旗艦となったことを示す光景だった。

「大和」の乗員が敬礼で見守る中、南雲を始めとする第一航空艦隊の司令部幕僚は、高柳艦長ら幹部乗組員に先導され、艦橋の中へと足を踏み入れて行った。

「私が使うには、勿体ない部屋だな。『赤城』の長官公室とは、広さも内装も段違いだ」

「大和」の長官公室を値踏みするように見渡しながら、南雲は言った。

「連合艦隊の全幕僚が会議を開けるだけの広さがあります。一航艦であれば、司令部幕僚と各戦隊の司令官、首席參謀、主だった艦の艦長を集めることも可能です」

「こんな部屋を使うのは、身分不相応ふそうおうという気がするよ。車引き出身くるまひの身には」

高柳儀八艦長の言葉を受け、南雲は苦笑した。

元々南雲は、水雷の専門家だ。駆逐艦長ちくくかんちやう、駆逐隊司令、水雷戦隊司令官といった職が軍歴の多くを占め、軽巡や駆逐艦の簡素な艦内に慣れている。

そのような身が「大和」の長官公室に入ったのだ。貧乏長屋の住人が、豪商の屋敷やしきや大名の居城に入り込んだような気分かもしれない。

「機動部隊の一員となった以上、本艦の乗員一同、全力を上げて空母の護衛任務を果たす所存です。ただ、伺うかがいたいことがあります」

高柳が、堅苦しい口調で言った。

「機動部隊の主力は空母。ならば、司令部は空母に置かれるはずです。現に長官は、真珠湾攻撃に始まる一連の作戦を、一貫いっかんして『赤城』で指揮されました。本艦が旗艦に指定された理由について、お聞かせいただけますか」

「複数の理由があるが、特に重視されたのが『大和』が持つ通信能力だ」

南雲の後ろに付き従っている参謀長草鹿龍之介少将が返答した。

高柳とは江田島えただじまの同期生だが、司令長官の前であるため、立場に応じた話し方になっている。

「敵を早期に見発見するためには、敵信の傍受ぼうじゆが有効だ。そのためには通信能力の高さが重要だが、空母は艦橋が低く、送受信の能力が劣る。そこで、通信アンテナの位置が高く、通信設備も充実している本艦が旗艦に選ばれた」

「本艦が敵信を傍受すれば、すぐ空母に伝えられます。敢えて、本艦を旗艦にする必要はないと考えますか」

「無線封止中ふうしの場合、傍受した敵信の内容は信号によって伝えなければならぬが、それには時間を要するし、見落としが生じる可能性もある。司令部が敵情を正確かつ確実に把握はあくするためには、通信能力

の最も高い艦を旗艦にするのが最善というのが、先の研究会で得られた結論だ」

「本件については、反対意見が少なくなかった」

研究会でのやり取りについて、南雲は話した。

「大和」の機動部隊配属について、最も強く反対したのは、連合艦隊参謀長の宇垣纏少将だ。

「『大和』は、帝国海軍の切り札です。米太平洋艦隊との決戦で、ここぞというときに投入し、敵の主力を一掃するために建造されたのです。前線に出すよりも、決戦兵力として温存すべきです」

というのが、その理由だ。

反対意見は、軍令部からも出されている。

砲術を専攻し、軍令の本流を歩んできた海軍の主流派の反発が、特に強かった。

だが山本五十六連合艦隊司令長官は、

「戦艦が海軍の主力だった時代は、昨年一二月一〇日のマレー沖海戦で終わっている。英国が誇った最新鋭戦艦でさえ、航空機には沈められてしまうこと

が実証されたのだ。戦艦が主力ではなくなった今、新しい任務を考えねばならぬだろう」

と強く主張した。

「『大和』を最前線に出し、万一のことがあったら、どうするのですか？」

との懸念に対しては、

「だからこそ、機動部隊に配属するのだ。『大和』は優れた通信能力を活用して敵情を探ると共に、対空火器で空母を守る。空母もまた直衛戦闘機によって『大和』を守る。『大和』と空母の長所を組み合わせるのだ」

と答えた。

「『大和』の温存を主張する意見は、なお少なくなかったが、山本は、

「軍艦は、床の間の置物ではない。最前線で、有効に活用してこそその軍艦だ。五年もの歳月を費やして、『大和』を建造した工廠の技術者や作業員の努力は、『大和』を使ってこそ報われるのだ」

と強く主張し、最後まで譲らなかつた。

最終的には山本が押し切る形で、「大和」の一航艦配属が決まったが、一航艦の内部でも、「大和」を旗艦とすることについて賛否両論があつた。

「空母同士の戦いでは、敵艦を直接視認できません。敵情の把握には、搭乗員の目と耳が頼りとなります。そのためには空母を旗艦とし、搭乗員から直接報告を受けることが必要です」

第二航空戦隊司令官の山口多聞少将、一航艦の航空甲参謀源田実中佐らは、強い語調で主張した。

「大和」を旗艦とする案に賛成したのは、第五航空戦隊司令官原忠一少将だ。

この二週間前、珊瑚海海戦で、世界初の空母機動部隊同士の戦いを経験している。

「私たちは、航空戦は分秒の勝負であることを実際に学びました。敵情の迅速な把握は、勝敗に直結します。珊瑚海海戦の戦訓を活かすためにも、通信能力の高い『大和』を機動部隊の新たな旗艦として

いただくよう希望します」

最終的には、山本が反対者を説得し、第一航空艦隊の将旗は「大和」に掲げられることとなったのだ。「正直なところ、戦艦から航空戦の指揮を執ることについては戸惑いもある。江田島同期の塚原（塚原にしろ）二四三中将。第一一航空艦隊司令長官）や二航戦の山口多聞ならうまくやるかもしれないが、私は航空戦については、まだ学んでいる最中だ。『大和』の艦上から、的確な指示を出せるだろうか、とな」

南雲は、心情を吐露した。

「現場での指揮を執るのは、各航空戦隊の司令官であり、各空母の艦長、飛行長です。各戦隊を統括する司令長官の役目は、空母でなければ果たせないわけではありません」

「参謀長のおっしゃる通りです。これまでのように『赤城』で指揮を執られた場合、全般的な状況把握に見落としが生じるかもしれません」

草鹿に続いて、首席参謀大石保大佐が言った。

「大所高所たいしやうしよに立つて判断するのが私の役割だ、ということだな？ 城の本丸ほんまるにいるのと同じだ、と」

南雲の言葉を受け、草鹿うなずが頷いた。

「今回の旗艦変更は私たちや各戦隊の指揮官にとり、長官御自身のお立場や旗艦の役割について考える、いい機会になったと考えます。『大和』を旗艦としたことで、一航艦全体が大きく前進したと考えてはいかがでしょうか？」

「艦長はどう考える？」

南雲は、高柳に聞いた。

一航艦の責任者として、艦長の存念ぞんねんを聞いておきたい——そんな意いが見て取れた。

「旗艦の艦長の役割は、司令部を守り、支えることです。艦長としましては、勝利のために本艦を存分に活用していただくよう望んでおります」

「感謝する」

南雲は大きく頷いた。期待以上の答が得られた、と感じたようだった。

「もう一つ、御教示いただきたいことがあります」

高柳は、あらたまった口調で言った。

「何だね？」

「山本長官は、『大和』の姉妹艦についても、本艦と同様の役割を考えておられるのでしょうか？」

帝国海軍は、大和型戦艦を最終的に四隻揃えるよう計画しており、現在姉妹艦三隻が建造中だ。

三菱長崎造船所で建造されている二番艦は、既に「武蔵むさし」の艦名が定められ、八月の竣工を目指して、最終工程が進められている。

三番艦には一一〇号艦、四番艦には一一一号艦の艦番号が与えられ、前者は横須賀海軍工廠で、後者は呉海軍工廠で建造中だ。

三、四番艦の竣工は三年ほど先になるが、「武蔵」は今年中に慣熟訓練を終え、戦力化される。

山本長官は、これらの艦をも機動部隊の旗艦として使用する腹はらづもりなのか、というのが高柳の知りたいことだった。

南雲は、少し考えてから答えた。

「姉妹艦については、長官は何もおっしゃらなかった。これは推測だが、長官は本艦と『武蔵』に、交替で機動部隊の旗艦を務めさせるおつもりかもしれない。一方が工廠で整備を受けているときには、もう一方が前線に出る、といったような」

「『武蔵』が前線に出て来るまでは、本艦が踏ん張らねばならない、ということですね？」

「私の推測が当たっていればな」

「三、四番艦が竣工すれば——」

「長官には、その頃まで戦争を続けられるおつもりはあるまい。長官は、対米戦は短期で終わらせねばならないとの信念をお持ちだ。米国の巨大な生産力がものを言う前に決着を付けたい、とな。そのお考えに、変わりはないだろう」

「責任重大ですな」

高柳は表情を引き締めた。

「私も含め、本艦の乗員一同、山本長官の短期決戦

構想の一翼いちよくを担になえるよう、本分ほんぶんを尽くす所存です」

「よろしく頼む」

南雲は大きく頷き、改まった口調で言った。

「艦長は既に聞き及んでいるかもしれないが、新たな作戦が間もなく始まる。『大和』にとっては初陣ういじんだが、我が一航艦にとっても、戦艦から航空戦の指揮を執る、初めての戦いになるだろう」

第一章 災厄の珊瑚海

1

昭和一七年五月七日夕刻、ニューブリテン島ラバウルの第八根拠地隊では、第八通信隊の将兵が総出で、敵信の傍受や味方の暗号通信の解読に当たっていた。

八根にとり、目下の最重要事は「MO作戦」——ニューギニア南東岸にある要港ポート・モレスビー、及びソロモン諸島南部のフロリダ諸島にあるツラギの攻略作戦であり、それに伴って生じた、日米両軍の空母機動部隊による戦いだ。

空母を中核戦力とする艦隊同士が、互いに敵の姿を見ることなく、航空機を飛ばして戦うという海戦は、過去に例がない。

この日の戦いでは、「MO機動部隊」——第五航空戦隊の空母「翔鶴」「瑞鶴」を中核とする日本艦隊が、敵の給油艦と駆逐艦一隻を撃沈し、「MO攻

略部隊」——モレスビーの攻略を担当する部隊が、小型空母「祥鳳」を敵艦上機の攻撃で失った。

両軍の本隊同士による決戦は、明日以降に持ち越されたのだ。

第八通信隊の全員が、どれほど微弱な電波であっても受信漏れのないよう、全神経を目と耳に集中させていた。

「敵のものと思われる通信を傍受しました。発信源は艦船と推測します」

一七時一八分（現地時間一八時一八分）、敵信班の班長を務める青山均兵曹長が報告を上げた。

「発信位置は分かるか？」

「ロッセル島よりの方位一四〇度から一五〇度の間。距離は約三五〇哩から四〇〇哩と見積もられます」

「昼間に発見された敵艦隊ではないな」

青山の答を聞き、第八通信隊司令田村保郎大佐は珊瑚海の地図を思い描いた。

ロッセル島は、ニューギニアの東方に連なるルイ

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。